

キャリア・アップのための「アクティブ・シミュレーション」の場としての大学の活用*

The University as a Field of “Active Simulation” of Carrier-up in Individual Person

望月 昭・中鹿直樹・イム ヒョンジョン・乾 明紀

MOCHIZUKI Akira, NAKASHIKA Naoki, LIM Hynjung, INUI Akinori

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: Carrier-up, Supported Autonomy, Active Learner, Active Simulation, University,

目的

行動的な「対人援助学」においては、援助者の役割は、援助・援護・教授という3つの機能の連環をこの順序で促進することと捉える(望月,2010)。それには様々な社会資源(セクター)や成員の連携が不可欠である。その中で大学というセクターが貢献できる内容は何か。新たなディシプリンとしての対人援助学の発信する場として、また人的・物理的な援助設定の資源として、大学をどのように活用しうるかについて、再確認することが当発表の目的である。

方法としてのキーワード

1) 他立的自律

「援助」優先という方針表明は、対人援助作業に限らず、社会に生きるあらゆる個人の行動が「援助つき」(他立)であること認識し、その上で各自の自己決定(=自律)を尊重する他立的自律という目標が前提となる。単独で行うという意味での「自立」を相対化する(望月,2010)。

2) 「キャリア・アップ支援」と「積極的学習者」

ライフイベント(例:就職)からのトップダウン的なスキル獲得、あるいは単独能力(ability)のボトムアップでもなく、「援助つきで『できる』」(=他立的自律)行動の成立とその選択肢の拡大について、絶えず当事者が関与できる「積極的学習者」(active learner)であることを支援することをキャリア・アップ支援と呼ぶ(乾,2011,本大会 PS 参照)。

3) キャリア・パスポート

常態としての選択肢拡大と自己関与の実現を支援する「キャリア・アップ支援」には、個人の変化のみでなく、その実現に必要な援助・援護・教授の内容を含めた情報移行が不可欠となる。学校における「個別的教育計画」、福祉における「個別の支援計画」などの記述は、個別の個人におけるその時点に至るまでの必要な援助設定、そしてその経過の上に試行されるキャリア・アップ支援を勇気づける機能を持つことが期待される。目標から現状を差し引いた「引き算」から次なる目標を設定するのではなく、「キャリア・パスポート」とでもいえる「できる」の累積と可能性を表現した新しい書式の開発と運営が求められる。対人援助学においては、直接的な支援のみでなく、こうした要請行動(=援護)としての言語的表現

とその運用の追及が重視されるべきであろう(中鹿ほか,2011;イム他,2011:本大会 PS 参照)。

4) 自分情報と他人情報(個人情報)

継続的なキャリア・アップ支援には関係者の情報共有が必要であるが「個人情報保護」が課題としてよく挙げられる(中鹿ほか,2011 本大会)。これはセキュリティといった物理的問題に帰属してはならない。個人情報問題とは他者(援助者)がもつぱら情報を扱う「他人情報」である事の謂いであり、コンテンツ作成(「できる」を中心とする)・運用に関する権利と便宜(ハンドル権)を当事者に託す「自分情報」に向けて再構築する必要がある。

5) アクティブ・シミュレーション

現状社会を再現してその適応の訓練の場として単独能力の「教授」を行うことをパッシブ・シミュレーション、そして個別の個人に必要な「援助設定」を見出し、それを現状社会に向けて提案(援護)するための作業をアクティブ・シミュレーションとする。対人援助学においては後者の方法が追及される(望月・野崎,1999)。

アクティブ・シミュレーションの場としての大学

我々は「できる」の創造とその表現を実証的に検討するために、大学構内において、個別の個人ごとに徹底的に設定と運用を試行できる模擬店舗(Café Ritz)の運用を、学生ジョブコーチシステム(中鹿,2010;辻岡,2011 本大会参照)の中で行っている。そこでは特別支援校との連携においてキャリア・パスポート書式(「できますシート」イム他 2011 本大会)の開発、そして大学生自身のキャリア・アップのための支援方法をも同型のロジックで行うかの検討も「学習学」の名称のもとに模索している(乾,2011 本大会)。

文献

望月昭・野崎和子(1999) 学習した「ことば」をどう般化させるか。コミュニケーション指導再考、その⑥(学研「実障教」)
望月昭(2010)「対人援助学の可能性」(福村書店)、第1章
中鹿直樹(2010) 同上、32-58.

* 当発表は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」(代表:土田宣明)、立命館 R-GIRO「対人援助学の展開としての学習学の創造」「科学研費基盤 C」(代表:望月昭)の研究費による。